

第7回 『華燭の毘』 (通算27回)

2005.4.21

我々の身の周りには多くの「専門」というものが存在します。もちろん、何か困難な事態に遭遇した場合には専門家の力を借りて対処しなければならないし、そのために専門というものがあ
るわけですから、これは重要なことではあります。

しかし、その「専門」というものが、「専門だから難しい」とか「専門用語だからわからない」とか
いう雰囲気醸し出しているのもまた事実。本当は難しいものに対処しなければならないから
専門用語が必要になるのであって、専門用語を使うから高度なものであるというわけではない
はずです。

東洋医学においても同じこと。専門用語や難しい言葉を使うからその医学が高度になるわけ
ではありません(そうであってはなりません)。あくまでも、その本質を理解することが重要な
のです。

本日は「清熱」という言葉について取り上げます。登場する生薬は清熱の剤として重要な

■黄連 ■黄芩 ■黄柏 ■山梔子

です。

それぞれの得意なアクション、そして適応を探ってみましょう。その結果として、それらが
配される処方目的が見えてくるはず。そしてなぜそれらを組み合わせるかについても。
さらに、同じ清熱でも、石膏や柴胡による清熱とはどこがどう違うのかもお考えください。

「清熱」という専門用語を使っても、それが何を意味するのかを考えなければ、それはただ雰囲気
を醸し出す演出にしかならないからです。

本日の番外編では「由来を知れば理解が深まる」の一例として、講演会場である銀座のお話をし
てみます。漢方薬だって同じこと。成り立ちを知らなければ難しく感じますが、知れば「ああ、
そうか」と得心いただけるはず。

知識を超えて思考の世界へ。どうぞわれわれがご用意いたしました診察室へお出かけください。
さあ、本日も漢方診療のはじまり、はじまり。

【本日のkeyとなる生薬】

黄連 黄芩 黄柏 山梔子

それぞれの生薬から『思いつく処方』をご想像ください。その処方の目的はどこにあり、
そしてどのように使い分けるのでしょうか。

【本日の内容について、ご確認ください】

黄 連 「心中煩、心下痞」～腹痛、嘔吐、下痢、衄血

連朴湯：黄連、厚朴

連蘇飲：黄連、紫蘇葉

大黄酒連瀉心湯：黄連、大黄

小陷胸湯：黄連、半夏、栝楼実

黄連湯：黄連、半夏、乾姜、人参、桂枝、大枣、甘草

黄 芩 「煩熱して出血」～腹痛、嘔吐、下痢、衄血、崩漏

黄芩湯：黄芩、芍薬、大枣、甘草

三物黄芩湯：黄芩、苦参、地黄

小柴胡湯：黄芩、柴胡、半夏、生姜、人参、大枣、甘草

黄 柏 「身黄、発熱して小便不利」～黄疸、黄色の汗、濃い尿

二妙散：黄柏、蒼朮

山 梔 子 「煩熱して胸中窒」～身熱、心煩不安

梔子豉湯：山梔子、淡豆豉

梔子乾姜湯：山梔子、乾姜

黄連・黄芩

三黄瀉心湯：黄連、黄芩、大黄

半夏瀉心湯：黄連、黄芩、半夏、乾姜、人参、大枣、甘草

黄柏・山梔子

梔子柏皮湯：黄柏、山梔子、甘草

黄連・黄芩・黄柏・山梔子

黄連解毒湯：黄連 黄芩、黄柏 山梔子

ポイント

- 「黄連、黄芩、黄柏、山梔子」
それぞれの違いと共通性

浅岡俊之

www.asaoka.org

今回からご参加の先生方へ

本日のテーマは「清熱」です。清熱とは「熱を取り去る」という意味です。前回取り上げました「寒」同様、「熱」も東洋医学にとって重要な「診断」ですので、その対応策も治療のひとつのポイントとなることはご理解いただけたと思います。

「熱を取り去る」ための生薬は様々です。何故かと言えば「熱」にも種類があるからです。

例えば

(A) 脱水で発熱

→診断(状態)は「熱」

→だから冷やす

は物理的な熱であり、石膏などで対応します。これはある意味わかりやすい対処でありましょう。

(B) イライラして胸中悶々とする

こんな経験は誰にでもあることですが、これは(A)とは明らかに異なる現象です。しかし東洋医学ではこれも「熱」と診断します。「内なる熱」「内にこもる熱」ということです。当然のことながら(A)とは違う対策がとられ、異なる生薬が担当することとなります。

(C) 熱性の下痢

さて、これはどうでしょう。「物理的な熱」でもあるでしょうし、かつ「内なる熱」でもあります。どのような対応をすることとなるのでしょうか。

東洋医学には診断のための四診というものがあります。すでにご紹介したとおりです。

この四診は当然のことではありますが治療方針の決定のために使われるものです（儀式として行われるものであるはではありません）。

(A)や(B)なら症状だけからある程度は方針が立ちます。しかし(C)の場合には何か具体的な証拠がないと対策を迷うことになってしまいそうですね。そういう場合には四診の所見から判断をすることとなります。

生薬には得意な部位、状態、症状というものがあります。これらを総合して用いるべき生薬を考えてゆくのが漢方治療です。これも四診からの絞ってゆくわけです。

疾患名からいきなり処方導き出されるものではないことは当たり前。そして徴候から処方へ直結するわけでもない、必要な生薬から処方が連想されるのだということをご理解ください。そうでなければ「生薬を複合する」意味すら理解できないことになってしまいます。